ぎざるによりても之を證し得べし。黑車子と曰ふものが室韋の一部に外ならざるは、既に通鑑會昌三年正月の條の註記に「詳考新舊書、黑車子卽室韋之一種」と論斷し、白鳥博士も亦論證せられたる所なり、而して此の部の據りたる地方は、白鳥博士〔二二五〕によれば唐末より遼初に亙りては南は張家口及び獨石口邊の長城より、北は Taal nôr の遙北方迄亙りしものと見ざる可らずといふ、余輩も大體に於て此の考に從はんとす、されば烏介可汗は振武に破られたる後、略ぼ東々北の方向を取りて逃れ、黑車子室韋に投ずるに至りしものにして、若し之に關する舊唐書廻紇傳の記事が、黑車子室韋を和解室韋に誤りたるものに外ならずとせば、其の文は「烏介驚走東北約四百里外、依黑車子室韋下營」と改むべきものなるべし、白鳥博士は烏介可汗の敗走に關しては、前述の如く只舊唐書の文面にのみ依據し、當時可汗が古北口若しくは大水峪の北方約八十里の地に營したるものと見られたるを以て、此の一節につきても、東北約四百里外とあるは西北約四百里の誤なるべきを論述せられたれども、余輩は舊唐書の過は寧ろ博士の依據せられたる去幽州界八十里下營の記事に在りて、博士の誤と認められたる「東北」の二字は却りて正確を傳ふるものなるを認めんとす。

〔尙此の際注意すべきは、舊唐書張仲武傳及び冊府元龜征討篇に

烏介可汗既敗、〔二二六〕不敢近邊、乃依康居求活、盡徙餘種、寄託黑車子部

と見え、新唐書同傳にも

烏介失勢、往依康居、盡徙餘種、寄黑車子部

と記さるゝもの之なり、冊府元龜の記事は恐らく舊唐書の記事を其の儘に取り、新唐書も亦舊唐書に依據したる